

自校における「放射線教育」はどのようにあればよいか
～3年次 平成26年度の取り組みから～

福島市立清水中学校 (代表) 校長 茅原 秀雄 教諭 根本 光二

1 研究の趣旨

平成24年度から2年間、放射線教育に取り組んできたことにより成果を得る一方で、次の課題が挙げられた。

- (1) 震災後の経過年によって変化していく状況に対応した教育内容の改善と、地域の実態に応じた指導内容に配慮しなければいけない。
- (2) 故郷福島のよさというプラス面を生徒の心に根付かせるとともに、生徒の自主的な活動を後押ししたい。
- (3) 放射線教育の充実とその成果の広報などが、「風評被害」や「フクシマ差別」を克服・打破する有効な手段である。

そこで、以下の仮説を設定し、本主題に迫った。

地域や生徒の実態に応じた放射線教育を学級活動・道徳・各教科で展開すれば、生徒を目指す生徒像に近づけられるであろう。

2 研究の概要

- (1) 学級活動では、市の「放射線教育指導資料-改訂版-」を自校化した授業を行った。
 - ① 1年「身の回りの放射線と人体への影響」「放射線から健康を守る取組～外部被ばく・内部被ばくを避けるためには～」
 - ② 2年「校地内の放射線量の測定」「放射線量マップからの考察」
 - ③ 3年「福島の現状と今後について知る」「ふくしま復興について調べたことを発表」「福島の復興に向けて自分が取り組めること」
 - ④ 特別支援「ゲストティーチャーによる霧箱実験と遮蔽の実験」
- (2) 道徳では、県の「ふくしま道徳教育資料集」を自校化した授業などを行った。
 - ① 1年「福島総文演劇の視聴」
 - ② 2年「温かさを分けあって」
 - ③ 3年「防災無線で呼びかけ続けた二人の職員（自作資料）」
- (3) 各教科では、理科と家庭科で授業を行った。
 - ① 1年家庭科「食材の放射能測定器を実際に使用し、福島の食の安全について考える。」
 - ② 3年理科「霧箱実験で放射線の飛跡を観察し、放射線の存在を実感する。」
- (4) 研修だよりを通して、代表者が研修会などで得た知見の共通理解を図った。
- (5) 授業公開や学年通信を通して、地域の教員と保護者に授業の実際を発信した。

3 成果と今後の課題

- (1) 平成26年度の取組について
 - 地域や生徒の実態に応じた放射線教育を学級活動・道徳・各教科で展開することができた。
 - 理科の霧箱や家庭科の放射能スクリーニングシステム、学級活動の線量計などの機器の活用を、授業の中に位置づけることができた。
- (2) 3年間の研究の成果について
 - 1年で「基礎知識の獲得」、2年で「体験的な理解」、3年で「自分自身も福島の復興を成し遂げる一員であるという意識の素地作り」と、系統性をもたせた学習内容を構築できた。
 - 各学年や各教師が独自に授業を行うのではなく、現職教育部が放射線教育の推進役を務め、成果と課題を蓄積してきたことにより、毎年実践内容を深化させることができた。
 - 教科の小中接続と同様に、放射線教育における小中接続も重要である。年々変化する生徒の実態を把握するためには、今後、より強固にしていかなければいけない。